

イニシアチブ-レスポンス分析の課題と可能性

—日本語の会話に適用する場合—

岩田 夏穂

1. はじめに

会話参加は、さまざまな様相を見せる。全員がその展開に携わり、イニシアチブを共有する場合もあれば、特定の人物が会話を展開させ、イニシアチブが共有されない場合もある。ここでは、前者を対称的参加、後者を非対称的参加ということにする。

会話全体の参加の対称性と非対称性は、主に発話量や質問や割り込み等、参加者個人の行為ごとにコード化し、その頻度を指標として示すことが多かった。この方法には、その会話における参加の様相の全体像を量的に把握し、データごとに比較できるという利点がある。しかし、参加の様相とは、参加者の局所的なやり取りによって協同的に形成されるものである。個人の頻度では、その様相形成の相互行為的な側面、また、その動的なプロセスが把握できない(Marková & Linell 1996)という問題がある。

この問題に一つの方向を示したのが、Linell, Gustavsson & Juvonen (1988) によるイニシアチブ-レスポンス分析 (以下 IR 分析) である。

本稿では、会話参加の全体的様相を把握するツールとしての IR 分析の意義と、それを日本語の会話に用いる際に調整すべき点を示すことを目的とする。さらに、先行研究ではまだ行なわれていない小グループでの分析への適用を試み、その可能性と課題を探る。

2. イニシアチブ-レスポンス分析の概要

2.1 理論的背景

IR 分析は、やり取りにおける局所的なターンの連鎖に注目してすべてのターンをコード化し、そこから全体的な様相の特徴を引き出すことを目指す (Linell et al. 1988)。その理論的背景の一つは、ヴィトゲンシュタインの言語ゲームに依拠するコミュニケーション・アクティビティの概念である。それによると、参加者の行為と全体的な活動は相互依存的で

あり、相互に構成し合っている¹ (Linell 1998) という。もう一つは、エスノメソドロジーの会話分析で、次に述べる分析単位やコード化のルールにおける「ターン」や「連鎖」の概念の基盤となっている。

2.2 分析単位

IR 分析の単位は、「ターン」で、それは、話し手がフロアを取っている時間である。Linell(1998)は、その時間に対応する言語・非言語行動を「発言」(contribution)と捉え、フロアの一部、あるいはそのフロアにとって重要な貢献となるべくデザインされるものとしている。ここでは、「発言」と「ターン」を一律「ターン」と呼ぶことにする。

2.3 コード化のルール

IR 分析では、ターンを一つずつ、後続隣接ターンとの関係(イニシアチブ的側面)と、先行隣接ターンや先行談話との関係(レスポンス的側面)に基づいてコード化し、18 カテゴリーに分類する(表1)。

イニシアチブ的側面には、相手への反応要求の性質と、新しい実質的な内容導入によってやりとりを展開させる性質がある。一方、レスポンス的側面は、先行する自分または相手のターンにリンクし、局所的な結束性をもたらす。表1のカテゴリーの欄の(1)から(5)は、このターンのイニシアチブ・レスポンスの性質の強弱に注目した分類である。

ターンには、イニシアチブとレスポンスの性質のうち、一方の性質が強く、もう一方の性質をほとんど持たないものがある。イニシアチブ性が最も強く、レスポンス性がほとんどないターンとは、先行ターンの拘束を受けていない(例えば、先行談話に無関係の唐突な質問等)ものを指す。反対に先行隣接ターンに依存し、イニシアチブ性がほとんどないものは「最小応答(minimal response)」である。

コード化では、イニシアチブ・レスポンスの強弱以外に、局所性(locality)、焦点性(focality)、適切性(adequacy)、自己-他者リンクにも注目する。通

表 1 18 のターンカテゴリー

ターンの特徴	カテゴリー	イニシアチブ的側面	レスポンス的側面
イニシアチブ・レスポンスの強さ	(1) >	強い (相手の反応要求)	ほとんどない
	(2) \wedge	弱い (内容を導入)	ほとんどない
	(3) <>	強い (相手の反応要求)	相手の先行隣接ターンにリンク
	(4) < \wedge	弱い (内容を導入)	相手の先行隣接ターンにリンク
	(5) <	ほとんどない	相手の先行隣接ターンにリンク
先行隣接ターン以外の特定の先行ターンにリンク (局所性)	(6) $\cdot\cdot>$	強い (相手の反応要求)	先行隣接ターン以外のターンにリンク
	(7) $\cdot\cdot\wedge$	弱い (内容を導入)	先行隣接ターン以外のターンにリンク
	(8) $\cdot\cdot<$	ほとんどない	先行隣接ターン以外のターンにリンク
自分のターンにリンク (自己リンク)	(9) $=>$	強い (相手の反応要求)	自分の先行ターンにリンク
	(10) $=\wedge$	弱い (内容を導入)	自分の先行ターンにリンク
	(11) $<=>$	強い (相手の反応要求)	相手の先行隣接ターンを無視して自分の先行ターンにリンク
		弱い (内容を導入)	相手の先行隣接ターンを無視して自分の先行ターンにリンク
周辺的な内容にリンク(焦点性)	(13) : >	強い	相手の先行隣接ターンにリンク
	(14) : \wedge	弱い (内容を導入)	相手の先行隣接ターンにリンク
不適切あるいは先送りと判断されるターン (適切性)	(15) —	ほとんどない	相手の先行隣接ターンにリンク
	(16) —>	非常に弱い	相手の先行隣接ターンにリンク
トピックの開始予告	(17) (>	弱い	
トピックの終結	(18) >)	弱い	

常、会話の流れに沿った発言とは、直前の相手の発言(局所性)の、その時話されている内容についてリンクするものである(焦点性)。そして、それは、相手に適切な応答として受け止められなければならない(適切性)。したがって、そうではないリンクのし方をしているものが有標となる。つまり、直前の発言を飛び越えて先行ターンにリンクしたり、直前の発言の主たる内容でない部分にリンクしたりすることや、相手ではなく自分のターンにリンクすること、相手の発言を応答として不適切、または不十分だと判断することも有標となる。

このように、IR 分析では、ターンが先行ターン

Linell et al. (1988:439-440)のリストをもとに筆者作成と後続ターンにどうリンクしているのかを分析し、表 1 のカテゴリーの欄にある記号を組み合わせることでコード化し、18 カテゴリーに分類する。

次に、18 カテゴリーにそのイニシアチブの強さによって 6 段階の評価点を与える(表 2)。コード化の作業終了後、その点数ごとに集計し、やり取りにおける各参加者のイニシアチブの強さを測る。やり取りをリードした参加者は、ターンが評価点の高いカテゴリーに偏るのに対し、リードされた参加者は、評価点の低いカテゴリーに偏る。

以上のように、IR によって、参加のし方の対称性・非対称性の様相が局所的なやり取りの連なりに

表 2 ターンカテゴリーの評価点

評価点	カテゴリー	カテゴリーの意味
1	—	最もイニシアチブが弱く、ターンのパスなどの応答を先送りするターン
2	<	イニシアチブがほとんどない最小応答・相づち
	—>	聞き返しや繰り返しによって応答を先送りするターン
	—>*	相手に協力を要求するターン
3	< \wedge	先行隣接ターンの内容を踏まえて新しい情報を付加するバランスの取れたターン
	$=\wedge$	自分の先行ターンにリンクし、新しい内容を導入するターン
	$\cdot\cdot<$	離れた先行ターンリンクする最小応答
	<)	トピックの終結を表明ターン
	(>	トピックの開始を予告するターン
4	<>	先行隣接ターンの内容を踏まえた質問
	$=>$	自分の先行ターンにリンクした質問
	$\cdot\cdot\wedge$	離れた先行ターンや先行談話の内容にリンクし、内容を導入するターン
	: \wedge	隣接ターンの周辺的な内容にリンクし、内容を導入するターン
	$<=\wedge$	相手の先行隣接ターンを無視して自分のターンにリンクし内容を導入するターン
5	\wedge	先行談話とつながりがなく、新しい内容を導入するターン
	$\cdot\cdot>$	離れた先行ターンや先行談話の内容にリンクする質問
	: >	先行隣接ターンの周辺的な内容にリンクし、相手に応答を要求するターン
	$<=>$	相手の先行隣接ターンを無視して自分のターンにリンクし応答を要求するターン
6	>	最もイニシアチブが強いターン 先行談話とつながりがなく、相手に応答を要求する「拘束されないイニシアチブ」

よって形成されることを量的に把握できる。

3. 日本語の自由会話への適用における調整点

これまでの研究に見られる IR 分析の分析例では、教師と生徒のやり取りや警察の尋問等、主に制度的場面が対象であった。岩田(2004, 2005)では、接触場面における日本語の自由会話を対象にした。その際に、いくつかのターンカテゴリーの定義を拡大し、(1) 相づちの扱い、(2) 発言機会のパス、(3) 自分の発話についての問いかけについて調整を行なった。

3.1 相づちの扱い

Linell らのルールでは、相づちが該当するコードがなかったため、次のようにルールを設定した。

まず、陳(2003)の相づちの分類を参考にし、フロアを要求せず、情報を断片的に理解したことを表す相づち(例えば、話し手を支援するアイテムの「継続子」continuer など)は、ターンとしてカウントしないことにした。そして、情報受け取り及び理解の表明と見られるターンは、「最小応答」と同レベル(評価点 2 点)としてカウントした。

3.2 発言機会のパス

発言機会のパスとは、ターンの移行適切箇所まで参加者がフロアを取るのを避けるために、実質的な内容のある発言をする代わりに継続子や最小応答で応答する(Svennevig, 1999)現象を指す。次の会話はその一例である。

- 01A [じゃ:今度(.)住所:とか教えてね
02B うん hhhh
03A う:ん そう[か ね
04B [うん
05A う:ん
06B そうだね
07A う:ん(網がけ部分が発言機会のパス)
08B あ 帰ったあとで たぶん

イニシアチブのある発話(01A)のあとに発言機会のパスと思われるやり取りが続く場合、そのイニシアチブのある発話に対する最小応答(02B)の次のターン(03A)は、応答に対する確認あるいは了承とみなし、3.1 で述べた「情報受け取りと理解の相づち」と同レベルとした。そして、発言機会のパスは、その次のターン(04B) から次のイニシアチブを持つターン(08B)の前までとした。そして、評価点は、最もイニシアチブの低い 1 点とした。

3.3 自分の発話についての問いかけ

岩田 (2004, 2005) のデータには、相手の理解を確認したり、自分の発話の不安な箇所について尋ねたりするターンがあった。これらが該当するコードがなかったため、新しく設定した (表 2*参照)。これらのターンは、聞き取り・理解の問題解決のためのものであり、目下の主要トピックの展開には寄与しないため、「相手に新情報付加」(評価点 3 点)よりイニシアチブが低い。しかし、相手から答えを引き出している点で「発言機会のパス」(評価点 1 点)よりはイニシアチブがある。よって評価点は、2 点とした。

以上の調整で、接触場面の日本語の自由会話を、より適切にコード化できるようになったと思われる。

4. 小グループの会話への適用の試み

IR 分析は、2 者間のやり取りを分析するためのルールであるが、適切に調整すれば、3 人以上のやり取りも分析可能 (Linell et al. 1988:417) であるという。しかし、まだその試みはなされていない。本稿では、その試みとして、今回は、3 人の接触場面の話し合い活動をアドレス先のみ注目してコード化した。その結果、全体的な参加の様相がある程度把握できることがわかった。

4.1 データの概要

データは、都内国立大学で 2005 年 7 月に実施された日本語教育実習における話し合い活動の一部である (時間は 5 分程度)。対象者は、実習生 1 名 (A=中国語母語話者)、実習の参加者 2 名 (B=ポルトガル語母語話者、C=日本語母語話者) で、全員女性である。分析は、音声データの文字化資料 (全部で 82 ターン) をコード化した。

4.2 コード化

対象者が A、B、C という 3 者間の会話の場合、話し手 A のターンのリンク先とアドレス先は、主に B か C、あるいは BC の両方になる。今回は、各ターンのアドレス先を付加してコード化した。先行ターンとの関係は、リンクのし方のみで、誰のターンにリンクしたかはコード化に含めなかった。その結果をグラフ化したものが図 1-3 である。

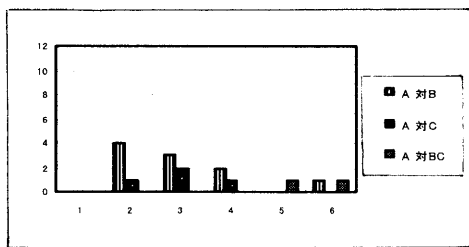


図1 Aの参加の様相

図1の実習生Aの参加には、ターン数は少ないが、イニシアチブの強いターンが見られる。このことから、Aが自分の参加を抑え、BとCに働きかけることで、話し合いの方向を決める傾向があることがわかる。

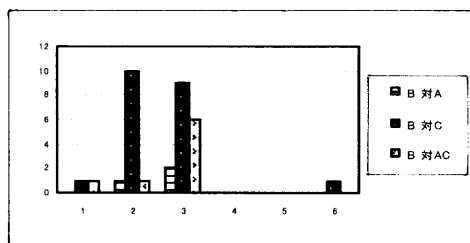


図2 Bの参加の様相

非母語話者参加者Bのターン配分には、Cに向けて評価2(相づちや最小応答)や評価3(相手の発話への新情報付加)に相当するターンが多く見られる。CがBに集中的に働きかけており、それに対応している様子が窺える。

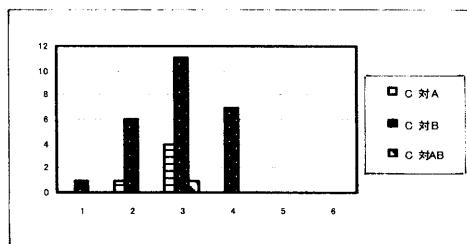


図3 Cの参加の様相

日本語母語話者参加者Cのターン配分は、Bに対する評価2、3、4(相手の発話に関する質問)に集中している。つまり、Bに強く働きかけ、その応答を受け止めることが中心になっている。

これらの結果から、Aは、この話し合いの方向を決める役割をしていたが、やり取りそのものの展開は、CがBに多く働きかける二者間のものを中心となっていたといえよう。

5. まとめ

本稿では、会話参加の協同構築性を踏まえ、量的に会話参加の様相を示せるIR分析の意義を述べた。さらに、ルール調整によって、接触場面の自由会話のより正確な分析や3人の会話の分析が可能になることを示した。

今回対象とした3人の会話は、互いに先行隣接ターンと後続隣接ターンにリンクしていた。このような直線的に展開しているやり取りであれば、ターンのアドレス先をコード化に付加することで、3人のやり取りのたまかな全体的様相が把握できると考えられる。今後は、まず、リンク先の先行ターンの話者をコード化に含める必要がある。さらに、アドレス先が錯綜する(例えば、Cにアドレスしているが、実際の宛先はBであるような)やり取りも分析が可能になるように、ルールを調整・整備していきたい。

注

1. 例えば、インタビューという活動は、参加者の「一方が質問し、一方が答える」という行為によって構成されている。また、参加者のそのような行為は、その活動が「インタビュー」であるということによって構成されている。

参考文献

- 岩田夏徳 (2004) 「日本語非母語話者が参加する相互行為の対称性および非対称性について-イニシアチブ-レスポンス分析の試み-」(未公開) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科修士論文
- (2005) 「日本語学習者と母語話者の会話参加における変化-非対称的参加から対称的参加へ-」『世界の日本語教育』第15号, 135-151.
- 陳姿菁(2003) 「会話のプロセスにおけるあいづちの構造-日・台の電話会話の場合-」(未公開) お茶の水女子大学大学院人間文化研究科国際日本語専攻博士論文
- Linell, P. (1998) *Approaching dialogue-Talk, interaction and contexts in dialogical perspectives*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.
- Linell, P., Gustavsson, L. & Juvonen, P. (1988) Interactional dominance in dyadic communication: a presentation of initiative-response analysis, *Linguistics*, 26, 415-442.
- Marková, I. & Linell, P. (1996) Coding elementary contributions to dialogue: individual acts versus dialogical interactions, *Journal for the Theory of Social Behaviour*, 26,4, 353-373.
- Svennevig, J. (1999) *Getting acquainted in Conversation*, Amsterdam, John Benjamins Publishing Company.

いわた なつほ/日本大学 日本語講座
natsuhoiwata@kips.net